

カンボジア・ボランティア 活動報告書

2019年9月

筑波大学公認学生団体
WorldFut TSUKUBA



目次

1. 団体概要 p 2
2. ミッションについて p 3
3. スタディツアー概要 p 3 ~ 5

現地での活動について

4. サッカー教室 p 6 ~ 8
5. 交流戦 p 8 ~ 9
6. 交流イベント p 10 ~ 13
7. インタビュー調査 p 13 ~ 22
8. JLBS/CJCC訪問 p 22

1. 団体概要

1. 団体名

筑波大学公認一般学生団体 WorldFut TSUKUBA(ワールドフットツクバ)
(団体HP:<https://worldfut-tsukuba.com>)

2. 活動理念

幸せと笑顔で溢れる世界を作るために、サッカーを通してすべての人々にキラキラ笑って暮らすキッカケを提供する。

3. 活動内容

私たちは「サッカー×社会貢献」を軸に、チャリティーフットサル大会やパブリックビューイングなどサッカーにまつわるイベントを企画・運営し、その収益を社会貢献活動に充てています。

これまでには当団体は、カンボジアのプレイベン州にあるスマオン小学校において、サッカーボールの提供をはじめ、サッカー環境の整備や小学校舎の建設などの支援を行ってきました。また、直近の支援活動と致しまして、スマオン小学校近隣のトルタノン小学校とタミン小学校でのサッカーグラウンドの建設を行いました。

また、イベントへの参加者の皆様には「サッカー」という身近なスポーツと「社会貢献」を結び付けることで、手が届きづらいと思われがちな「社会貢献」を身近に感じてもらえる機会を提供しています。

4. 今までの活動実績(一部抜粋)

【国内】

- ・ チャリティーフットサル大会 (年2回)
- ・ かしまビーチサッカー大会 (鹿嶋市との協力)
- ・ チャリティーパブリックビューイング/上映会
- ・ One Day Without Shoes (株式会社シンフォニー TOMS様との協力)
- ・ つくばワールドフットサル (つくば市との協力)

【国外】

- ・ カンボジアスタディーツアー (年2回)

【これまでの支援】

サッカーボール/ビブス/ユニフォーム/運動靴/ボールかご/缶パン/グラウンド建設

2. ミッションについて

【国外ミッション】

サッカーを通して人との繋がりを築く

【背景】

昨年のスタディツアーで、村の人たちの人生はだいたい決まっている（同じループである）と感じた。＜小・中学校（家の手伝い）（→高校・大学）→ドロップアウト→出稼ぎ（縫製工場・ブノンペン・タイ・韓国etc）＞こうした閉鎖的な環境にあることから、将来の選択肢が少なく、村と出稼ぎ先以外の世界を知らないのではないか。

このことから、決まりきったコミュニティ（家族・村・出稼ぎ先）以外のコミュニティと繋がりを築くことが必要だと感じた。

そうすることで、普段の生活、これまでの生活ではできなかったであろう経験や人との交流を通して、村の人々の価値観や世界観が変わるのではないかと考えた。

また、コミュニティ同士の繋がりを「サッカーを通して」築いていくことで、仲間意識や他者へのリスペクトの精神などを養うことができると考えた。

団体としては、このミッションを達成することで理念の達成に近づくと考えている。

【対象】

主な対象は子供であるが、上記のミッションをもとに4つに分けた。

	対象
①	地方の子供×地方の子供
②	地方の子供×都市の子供
③	地方出身のプロサッカー選手×地方の子供
④	地方の子供×地方の大人

3. ボランティア活動概要

【概要】

期間：9/12～21（10日間）

参加メンバー：14名

滞在場所：カンボジア王国 プレイベン州

【訪問した村】

カンボジア王国 プレイベン州 トルタノンカウ村、トルタノンレッ村、タミン村

●トルタノンカウ村 トルタノンレッ村

トルタノンカウ村にはトルタノン小がある。トルタノン小は弊団体が支援しており2017年にグラウンドを建設している。トルタノンレッ村はトルタノン小に通う子供たちが住む村である。トルタノンレッ村はトルタノンカウ村に比べコンクリート造の家が多く裕福な印象を受けた。

どちらの村にも電気、水道は通っていない。水は雨水を利用して生活している。最近電柱が建てられたが、いつ電気が通るかは未定らしい。

【ツアー目的】

ミッション達成のための第一段階

【活動した小学校】

○トゥールタノン小学校

生徒数：285人 教員数：6人（2018年9月時点）

○タメン小学校

生徒数：481人 教員数：11人（2018年9月時点）

○スマオン小学校

生徒数：不明 教員数：不明

【活動内容】

上記のミッションをもとに、今回のスタディツアーでは①②④の対象に対して活動を行った。ただし（⑤）に関しては、ミッションとは別に行った。

	対象	活動内容
①	地方の子供×地方の子供	I. サッカー教室 II. 交流戦
②	地方の子供×都市の子供	III. 交流イベント@KMHフットボールパーク（ISIアカデミー）
④	地方の子供×地方の大人	IV. 調査（コミュニケーション）&プチPV
（⑤）	協力者	V. JLBS/CJCC訪問

サッカー教室

文責 花折

【実施日・場所】

9/15、9/17~9/19

午前→タミン小 午後→トルタノン小

9/14

午前→トルタノン小

【対象】

トルタノン小・タミン小周辺に住む10歳~18歳の子供

【目的】

(14.15日) アカデミーに連れていく子を選抜することを目的とした。

(17日以降) ミッション①の第一段階として、「チーム意識を持つ」「勝敗へにこだわる」「リーダーシップを身につける」「先生によるコーチング」の3つを目的とした。

【練習概要】

午前中は9時~11時、午後は2時~4時の間に行った。

用具はビブス・マーカー・ボール・ホイッスルをそれぞれ日本から持参して使用した。

基本的に以降のような手順での練習を行った。

また、交流イベント以降の練習では、練習前に全体をチーム分けし、リーダーを決めてもらった。

リーダーに求めたことは、「チームの統率を取ること」である。

1. 鬼ごっこ

今回はアップとして楽しみながら走って体をつくっていた。手つなぎ鬼という形式にして自分の鬼のグループ、もしくは他の鬼と協力して相手を追い詰めるなど周りと声を掛け合って頭を使って協力することを目的とした。

2. ドリブルリレー

技術面の練習として今回は雨期ということもありグラウンド状況が不安定だったためパス練習よりもドリブル練習が適していると判断した。最初はボールを持たずに行い、その次にボールを持ち、片足のみなど制限をつけて行うといった形式にしていった。

ここでは勝負を意識してもらうために複数グループに分かれて行い最下位のチームは簡単な罰ゲームを行うなどをした。

3. ゲーム

毎回練習の最後に行った。

【効果】

「チーム意識」については、トルタノン小学校では、練習中にチーム単位で行動してくれる場面などが見られた。試合中にも、失点後に話をしている場面が見られた。しかし、内容はわからなかったのが効果と言えるかは微妙である。

タミン小学校では、トルタノン小学校と同じような場面は見られなかった。

「勝敗へのこだわり」については、どちらの学校も勝てば喜ぶが負けても悔しくわないという感じであった。また、負けたチームを馬鹿にするような子供も両校に見られた。

「リーダーシップを身につける」については、トルタノン小学校では、大体同じ子がリーダーを務めてくれた。その年齢は18歳・15歳・10歳の子であった。どの子にも、チームを統率しようとする行動が見られた。15歳の子に関して言えば、少々荒々しい場面も見られた。タミン小学校では、毎日リーダーを希望する子が変わったが、皆10～12歳の子であった。しかし、チーム内に年上の子供がいるからかなのか年齢的な問題なのかはわからないが、どの子もチームを統率しようとする行動は見られなかった。

「先生によるコーチング」について、どちらにも共通して見られたことは、「練習を遠巻きに見る」ということである。私の方から「近くで見てあげてほしい」と伝えてようやく少し近づく程度であった。ただ、トルタノン小学校では、積極的に練習に参加してくれ、子供達に声をかけるようになった。また、先生の考えや問題意識も聞くことができ、協力したいと言ってくれた。タミン小学校では、話は聞いてくれたが、相槌を打つだけだった。練習でも遠巻きに見ているだけの状態が長く続いた。

【所感】

当たり前なことだがトルタノン小とタミン小での同じ練習をしたときの反応の差がとても大きく、練習メニューも同一のものでなく分けて行うべきなのかもしれないと思った。また、数回練習の前後にゴミ拾いを行った。ゴミを拾う時はただ拾わせるだけでなく拾ったゴミをどこに捨てるかまで考えないと適当なところに投げられるということが分かった。次回からはそういった細かい部分まで考えてサッカー教室を行う必要があると思った。





交流戦

【概要】

これまで支援をしてきた3校でのサッカー交流試合を開催した。

<期日・場所>

9/20・スマオン小学校

【目的】

<リーグ創設>

- ・試合時間やカテゴリー分け、移動手段の見積りをする。
- ・各校の先生への協力をお願いする。

<チーム創設>

- ・学校ごとのチーム意識を持ってもらう。
- ・勝ち負けを意識する。

【試合形式】

試合時間は、7分-1分-7分。チーム数はトルタノン小学校（2チーム）タメン小学校（2チーム）スマオン小学校（1チーム）の5チームで、総当たり戦を行った。

カテゴリーに関しては、今回は学年・年齢関係のないチームを各小学校で作った。

下は小学校10歳～上は20歳が集まった。

各チームでリーダー(キャプテン)を決めてもらった。

ビブスは日本から持ってきたものを使用。

移動手段に関しては、メンバーが移動用に使用したマイクロバスを使用した。

マイクロバスでの移動時間は、「トルタノン小学校ースマオン小学校」、「タミン小学校ースマオン小学校」のどちらも30分程度。「トルタノン小ータミン小学校」の移動時間は60分程度であった。

【効果】

カテゴリーと移動手段に関しては期待していたようにはいかなかった。

各校の先生に集まってもらうことができ、自分達の考えを伝えることができた。

試合中に子供同士でコミュニケーションをとるシーンが見られた。

勝てば喜ぶが、負けても気にはしないようだった。

【写真】

～説明を聞く様子～



～試合前の円陣～



～試合中～



～応援の様子～



～優勝チーム（トルタノン小学校）～



交流イベント

担当者 佐野

【実施日・場所】 9月16日14時より KMHスタジアム (ISIアカデミー保有)

【対象・人数】

- ・トルタノン小学校、タミン小学校から各12人程
- ・ISIアカデミーのアカデミー生10人程
- ・現地プロサッカーリーグ選手
小林大介さん、長谷川務さん、プライベートさん

ご協力いただいた方

渡邊卓矢さん、アカデミーコーチのエリックさん、水野輝さん

【概要】

プノンペンにあるサッカーアカデミーにおいて、アカデミーの子どもたちと村の子どもたち、カンボジアサッカーリーグのプロ選手が交流するイベントである。

【目的】

国外ミッション「サッカーを通して人との繋がりを築く」を達成するための活動の一つ、「村の子と都会の子をつなぐ」活動であった。村の子と都会の子をつなぐことで、以下のような効果を狙った。

- ・村の子たちがサッカーの本格的な設備、整った環境を知る
- ・村の子たちが本気でサッカーに打ち込む都会の子たちと触れ合うことで刺激を得る
- ・都会の子どもたちが村の子どもたちを知る

さらに、渡邊さんのご協力により、現地で活躍するプロサッカー選手の方々にもご参加いただけたため、子どもたちがプロサッカー選手のレベルを体感することも目的となった。

【内容】

はじめに、WorldFut主導でアイスブレイクを行った。その際、村の子、都会の子、プロ選手をごちゃ混ぜにしたチーム分けとした。その後、エリックさん主導で、アカデミーの練習メニューをいくつか行った。そのメニューは本格的なサッカーの初心者である村の子どもたちでもできる、易しいレベルのものをお願いした。最後にフルコートでゲーム形式の練習を行った。その際、プロ選手と都会の子の合同チーム対村の子どもたち全員という対戦をしたあと、三者をごちゃ混ぜにしたチームを3つ作り、対戦した。

練習終了後、写真撮影をし、プロ選手のお二人から子どもたちへメッセージを頂いた。

・アカデミーの練習メニューの様子① (イス取りゲームの要領でエリックさんが笛を吹いたらボールを取る。)



・アカデミーの練習メニューの様子②（ボールの近くで2人が横になり、笛と同時に取り合う。）



・アカデミーの練習メニューの様子③



・ゲーム形式での練習の様子（村の子がシュートを打っている。）



・練習後の集合写真



・練習後、プロ選手のお2人からメッセージを頂いている様子。



【計画段階からの変更点】

- ・イベント前に施設を見学させてもらう予定であったが、無しに。

→イベント実施の数日前、村の子どもたちが履くスパイクとソックスをどう準備するか、という問題に気づきイベント当日の朝、プノンペン市場にて全てを買いそろえることとなった。1つの市場ではそろいきらず、また予想よりも購入とプノンペン市内移動に時間がかかってしまったためKMHスタジアム到着が遅れてしまったことが原因である。

- ・雨により、予定時刻より早めに練習を切り上げた。

【成果】

長い移動時間を共にし、トルタノンータミン間の交流は進んだようであった。都会に行ったこと自体やファストフードを食べられたことが嬉しいという声が多かったものの、アカデミーの子どもたちのようなサッカーがしたいと思う子もおり、子どもたちの今後のサッカーへの関わり方にプラスな影響があったのではないかと思われる。

【課題】

- ・移動に時間がかかった。
- ・今後このような機会があった時に村の子どもたちのスパイク、ソックスはどうするか。
- ・想定よりも村の子と都会の子の交流は盛んではなかった。
- ・プロ選手からの吸収が少なかったのではないか。

→プロ選手のすごさを分かっていない。もしくは子どもたちが興味を持っていない。

- ・アイスブレイクが円滑に進められなかった。
- ・同伴した先生たちがなにを得たか、どう意識が変わったか分かりかねる。
- ・本イベントに参加した子どもたちが、参加できなかった子供たちに今回の経験を伝えられたか、分からない。

【所感】

全体を通して、整った環境でサッカーをすること、プノンペンに行くことなど、村の子どもたちは楽しんでいるようで、良い経験になったのではないかと思われる。今後、この経験がどのように働くのか、子どもたちの行動に変化をもたらすか見ていきたい。

また、今回は現地アカデミーやプロ選手の方々と行うイベントが初めてであったため、渡邊さんがその協力してくれる方々と繋いでくださった。今後はこの繋がりをもとに、自分たち自らで密に連絡を取り、詳細な思いや企画内容を決めなくてはいけない。

また、村の子どもたちはプロ選手のすごさにあまり気づいていないようで、メッセージもちゃんと聞いていなし、質問も特に出なかった。子どもたちにとってより印象的な体験にするために、またプロ選手から多くのことを感じられるようにするためにどうすればよいか考えていかなければいけない。

インタビュー調査

文責：佐藤 彩

【実施期間】

2019年9月14日～9月19日

【対象】

タミン村 - 村人
タミン小 - 校長先生
トルタノン村 - 村民
トルタノン小 - 校長先生, 先生
カウトム小 - 校長先生
チェシム大学 - 大学生

【目的】

1. 現地の方と直接コミュニケーションを取ることで、現地の現状を知る、親睦を深める。
2. WorldFut TSUKUBAの活動や想いをインタビューを通して伝え、団体の理解者や共感者を得る

【内容】

今回行ったインタビュー調査は、会話をしていくなかで内容を深めていくという形式で行った。

1. 村人へのインタビュー：家族構成、職業、ライフライン、出稼ぎ、子どもたちの様子や、村に対してどう思っているのか、親、または祖父母が子どもたちに将来どうなってほしいか、子どものドロップアウトについてどう考えているかなどを話した。また、サッカー教室の様子を動画にまとめ、パブリックビューイングという形で村人に見てもらった。
2. 先生へのインタビュー：小学校での子どもたちの様子や中学・高校への進学率、多くの子どもたちが中高をドロップアウトする理由やそのことに対して先生が思うことなどを話した。
3. 大学生へのインタビュー：大学の授業やサークルの有無、大学進学のための奨学金、カンボジアの教育格差についてどう考えているかなどを話した。

【結果】

1. 村人のインタビューでは、村人にとって村の状況は昨年行ったインタビュー調査時と比べて変わったことはないそうだった。特に変わったことといえば、携帯電話の普及だそうだ。大人はもちろん、子どもたちも携帯電話でゲームをしていたり、動画を見るなどの娯楽として利用していた。固定電話はないと言っていたため、スタツア前の勉強会で鈴木先生がおっしゃっていたような「リープフロッグ型発展」を現地で実際に感じる事ができた。

親世代がプノンペンや国外に出稼ぎに行き、祖父母世代が子世代を育てるという家族構成や家庭状況、職業も農業、漁業などで以前の調査から特に変化はないようであった。ライフラインについては、以前の調査同様、電気はソーラーパネルや車のエンジンから得ている家庭がある一方、電柱から電気を得ている家庭もあった。そのことに関して言えば、インフラの整備は少しずつ進んでいるのではないかと感じた。

村の中でも学校から少し離れたところに住む大人は子どもたちの様子を見に学校に行くことがあまりないということが分かった。そのことから、私たちが行っているサッカー教室の様子や子どもたちがサッカーを楽しんでいる様子を見てもらうために、サッカー教室の様子をダイジェスト動画として作り、インタビュー調査の際に村人に見てもらった。大人もグラウンドに行き、子どもたちと一緒にサッカーをしたり、応援したりすることで、さらにサッカーが盛り上がり、たくさんの村人が交流する機会になったり、村の活性へと繋がるのではないかと考える。見てもらった結果、「子どもたちが楽しそうにサッカーをしていてうれしい」「今度自分もグラウンドに行ってみる」などという前向きな感想をもらった。

カンボジアの子どもたちの多くが中高や大学まで進んでも、ドロップアウトして出稼ぎに行ってしまうという状況について親たちが問題意識を持っているのか、どのように考えているのかを知るために子どもたちのドロップアウトについて尋ねた。このインタビュー調査で、親世代が教育の必要性や大切さを十分に理解していないということがわかった。奨学金を借りてまで大学に進学しても、勉強が楽しいと思えず、大学生ではお金も十分に得ることができないことから、大学を中退してまで出稼ぎへ行く子どもたちが多。また、そのような決断をほとんどの親が了解し、学校を中退しているということが分かった。

2. タミン小の校長先生へのインタビューでは、毎年2月に各村の小学校対抗でサッカー、バレーで球技大会が行われていることがわかった。この球技大会は政府からの指示で行われており、勝ち進めば全国大会へと出場できるものであり、4校それぞれから参加費を出し、開催されるものであるようだった。大会会場は基本的にスマオン小学校で、子どもたちは徒歩や自転車、バイクなど自力で会場へと向かう。先生が応援などに行くことはなく、審判などもいるはずだが誰が行なっているのかはわからないとのことだった。

カウトム小校長先生とのインタビューでは、毎月スマオン小学校、トルタノン小学校、タミン小学校、カウトム小学校の校長先生が集まり、学校運営や教育方針などを話し合う会議が行われていることがわかった。

リーグ戦を設立するために、開催場所や子どもたちの交通手段、各小学校の先生方が連携してもらうことが必要となる。

タミン小の校長先生に子どもたちが中高大学でドロップアウトが多い理由を尋ねると、教育に充てる十分なお金がなく、親の手伝いをするため、他の生徒はバイクで通学するの

に、自分は自転車通学で遠くて大変だから、子守をしなければいけないからなどというような理由が挙げられた。

子どもたちがドロップアウトしてしまうことに対してどのように考えているのかを尋ねたところ、「可哀想だとは思う。でも、助けられない、仕方がない」と校長は答えた。問題意識は持っているものの、教師として何かを変えたいというような想いや行動はないようだった。

各小学校の先生方のインタビューでわかったことは、学校の先生は勉強を教えるだけで、日本ように子どもたちの生活や道徳教育には関与していないようであった。

また、各小学校の校長先生と話していると、ネット、ボール、グラウンド整備など、物資での支援を要求されることがしばしばあった。

3. 大学生は大学近くの村から通学している学生が多いが、大学施設には学生寮があり、遠くから来た生徒が住むことも可能であるようだ。なお、私たちがサポートしている村から来ている生徒はあまりいないようだった。

大学生に「なぜチェシム大学に進学したのか」を尋ねると、「この大学から奨学金が出るからこの大学に来た」という学生が多かった。また、「奨学金が出たから、大学に通えているけど、出てなかったら、出稼ぎしていた。」と言う大学生もいた。実際、インタビューした大学生の友人は奨学金が下りずに現在プノンペンで出稼ぎしていて、肉体労働に苦しんでいる」と話してくれた。経済格差が結果的に教育格差に繋がっていることに対してどう思っているのかと尋ねたところ、「可哀想だけど仕方がない」と答え、問題意識を持っているようには感じられなかった。

大学教員と話したところ、チェシム大学には学部ごとや仲間内で複数のサッカーチームがあり、大学内で対抗戦が行われ、その対抗戦で優勝したチームが日本でいうインターカレッジのような大会への参加することができるという仕組みもあることが分かった。

今回の村人へのインタビュー調査でどの家庭も共通した反応をすることがあった。それは、「〇〇に対してどう思う？」「どう思った？」などという感想を求める聞き方をするとほとんどの村人が答えるのに困った様子を見せたり、答えられなかったりなどということがあった。また、会計士を目指す大学生になぜ会計士を目指しているかと尋ねると、その大学生も困ってしまい、答えることができなかった。

通訳の方にその理由を聞くと、「カンボジア人は感想や感情を相手に伝えるという習慣があまりない。」と言われ、カンボジアにどのような文化があるということを知った。

【所感】

1. 日本の場合で考えれば、大学を中退して出稼ぎに行くという子どもの決断に対して、ほとんどの親が一度は止め、大学卒業をなさいと説得するだろう。これは、日本人が大学を卒業すればある程度の職に就くことができるという考え方があることも影響していると思うが、日本人が教育を受けることがいかに重要であるかを理解しているからであろう。

インタビューしたある男性の3人の子どもは中高大のいずれかで全員がドロップアウトして現在プノンペンへ出稼ぎに行っている。その男性は子どもたちが学校を辞めたいと言ったとき、彼は止めなかったそうだ。その理由は、大学を卒業しても安定した給与がもらえる職業に必ずしも就けるとは限らないから、また、子どもたちがやりたいことをやってほ

しいから。子どもたちが出稼ぎに行きたいと言って行かせた結果、教員を目指して大学進学しドロップアウトした彼の息子は肉体労働がきつく、やっぱり先生になりたい、もう一度大学に通いたいと今は後悔しているようだ。インタビューした男性もそのことを言われ、あの時止めなかったことを後悔していた。

カンボジアにおいて現在の子どもたちの世代の親が教育の重要性を理解していなければ子どもたちもそれを理解できず、この悪循環が続いていく。目の前のお金を得ることより、教育を受けることがいかに大事かを大人が理解していれば、子供たちの将来は、今よりももっと明るいかもしれない。大学を卒業しても良い職に就くことができないというカンボジアの国の問題はこちらからはどうにもできないが、教育の重要性を今の親世代・子どもたちに私たちが伝えることで教育環境の改善のきっかけを提供することを目指したい。



インタビュー調査をさせていただいた村人の方と



インタビュー調査の様子



パブリックビューイングの様子

2. 私たちが今後リーグ戦を設立するためには、開催場所の確保、子どもたちの会場までの移動手段、審判、試合開催のための各先生方の連携が必要となる。今回のスタツアで知った、年に1回行われる球技大会や4校の校長先生が月に1回集まる機会があるということは、上記で述べたような項目をほとんどクリアできるものであり、リーグ戦設立のために、今後球技大会や校長会議をうまく生かしていきたいと考える。

結果の最後に述べた、「物資での支援」は必要であれば私たちはいくらでも物資を提供することができる。しかし、私たちの団体は物資の提供だけを行う団体ではない。グラウンド整備に関しても、整備の仕方などは教えたり、始めは一緒にグラウンドを整理したりなどはするが、私たちが提供した物資や知識を利用して子どもたち、村人が将来的に自立して行ってほしいと思うため、サポートの仕方を顧みたいと考える。



カウトム小校長先生、カウトム小の子どもたちと

3. リーグ創設，継続のためには、子どもたちのサッカースキルを磨くための継続的な練習が必要になる。サッカーの指導者の候補として、小学校の先生や村人などを考えていた。しかし、今回のスタツアで大学に複数のサッカーチームがあるということ、チームが練習を重ねて大学内でリーグ戦が行われているということ、立地的にも大学から村はバイクがあれば行くことができるということから、指導者やリーグ戦での審判などとして村の子どもたちと関わってほしいと感じた。

また、そのように感じたと同時に、自分の村とは異なる村の子どもたちと関わってもらうことで、家庭の経済状況によって教育格差があるということ、ドロップアウトする子どもたちが多くいるという現状を知ってほしい、また、このようなことに対する問題意識を持ってほしいと考える。そして、私たちと一緒に村における教育の悪循環をどのように考えるか、どのようにするべきなのかを国は違えど同世代として話し合ったり、考えていきたいと考える。今後のスタツアでは、大学生とコミュニケーションをとったり、一緒にサッカーをしたりして、まずは仲を深めることから始めたいと考える。



お話をさせていただいた教授、大学生と



大学生にインタビュー調査の様子



大学のサッカーグラウンド

カンボジア人は感想や感情を相手に伝えるという習慣があまりないという文化があると知り、今までは私たち日本人のやり方で質問内容や方法を行ってきたが、今後からはカンボジアの文化に合ったやり方、カンボジアの方にも伝わる伝え方、答えることができるような質問の仕方を考えていきたいと思った。

JLBS/CJCC訪問

【実施日・場所】

9月13日 午前：JLBS (Japanese Language and Business School of Cambodia)
午後：CJCC (Cambodia-Japan Cooperation Center)

【目的】

現地で活動してくれる大学生を探す。

【成果】

(1) JLBS

この日本語学校は、元々は横浜にあるレストランへの人材派遣のための日本語訓練学校として建てられた面があり、通っている生徒の年齢は小学生～社会人へと様々であった。

実際に授業の様子を見学させていただいたり、生徒たちにメンバーが日本語を教えるということもさせてもらい、生徒たちとコミュニケーションを取ることができた。また、校舎長の菅原さんとお話しさせていただいたりもしたが、自分達の目的に合うような人はいないと思われた。しかし、菅原さんを通して、他の機関や団体を紹介していただくことはできると感じた。

(2) CJCC

この日本語学校は、JICAの支援のもとで運営されており、センター長の方もJICAを通して派遣された方であった。日本学校として独立しているわけではなく、王立プノンペン大学に属するセンターであり、主に日本語学科の生徒が来るが、それ以外にも様々な学部の生徒が放課後や空いた時間に授業を受けにやってくる場所である。また、生徒だけでなく一般の大人たちにも解放されている。

こちらのセンターでも、自分達の目的に合う人は見つけられなかったが、大学生が多いということに今後の可能性は感じられた。

どちらの学校でも、自分達の活動に協力できることがあればしてくれると言ってくれた。今回できたこの繋がりを活用していくことが大事だと思われた。